元代の政治と社會

蒙古至上主義

凡そ蒙古至上主義は、元代において何事にも附きまとうて現はれたことであつて、その政治の如きも、固よりまた蒙古人の福利の擁護增進を以て第一義としたものであつたことはいふまでもない。蓋し彼等がその征服した土地人民を自から統治したことは、前にも述べたやうに從來北族の間に認められた掠奪行爲と比較すれば、その精神において遙に進歩したものであつたけれども、しかも兩者の距離は實質的に考へれば左程甚だしく隔つたものではなく、國家意識の如きは到底なほ幼稚であつたと見なければならぬ。されば蒙古人の利益の乏しいやうな國政は、たとへそれが國內多數を占むる漢族の爲に、如何に必要なことであつても進んで施行しようとはしなかつたのみならず、彼等の利益の爲には中土の農耕地を草原にして牧場にしようとしたり、或る族姓の漢人を悉く殺戮しようとするが如き暴擧をも案出し、また彼等の放縱無節制の生活の爲には國費の濫用も風俗の壞敗も意としなかつたのである。

たゞ漢民漢土を統治するについては、如何にしても砂漠の民を治する方法を以てすることはできないので、この爲には漢族を用ひ、在來の方法に準據した政治を行ふ外はなかつた。しかもこの點においても、それぞれの政治機關の長官には蒙古人を任じて統轄せしめることを主義とし、漢族をして欲するまゝに行動せしめることを警戒し